

近代日本における女性エリートの輩出過程に関する考察 —「私の履歴書」執筆者の事例から—

多 賀 太

1. 問題の所在

本稿は、明治・大正期生まれの女性エリートの自叙伝に書かれた学校教育、家族生活、結婚に関わる経験に焦点を当てながら、彼女らの輩出過程の諸特徴を明らかにしようとするものである。

メリトクラシーや学歴社会に関する古典的な命題においては、近代化の進行にともない、直接的な身分世襲や財産相続に基づく社会経済的地位の世代間再生産は衰退し、それに替わって学校教育と学歴取得を経由する選抜・配分過程が支配的になるとされてきた。それゆえ、従来の教育－地位達成研究の焦点は、官公庁や民間企業など近代的セクターにおける主流派＝メリトクラティック・エリートの輩出過程に当てられてきた（麻生 2009など）。

とはいえ、そうした歴史的趨勢のなかにあつて、エリート層でありながらメリトクラティックな地位達成ルートに必ずしも乗る必要がない、もしくはそうしたルートから周辺化されてきた集団もいくつか存在する。この種のエリート集団の輩出過程に関しては、例えば山内（1995）によって文芸家についての詳細な分析がなされている他、筆者もこれまでに、旧中間層出身の経済人（多賀・山口 2016）、伝統芸能家（多賀 2020a）、画家（多賀 2020b）、画家以外の美術家（2021）のそれぞれについて、自叙伝を対象として分析を行ってきた。

しかし、これらの集団を縦断する形で、メリトクラティックな地位達成ルートにおいてより周辺化されがちなエリート集団がもう1つ存在する。女性エリートである。

戦前期生まれの女性エリートの輩出過程については、一方で、一定の基準で抽出された人物を対象とした量的研究が行われてきた。例えば、冠野（1996）は、『人事興信録』に掲載された1894年から1955年生まれの女性たちの記録を数量的に分析し、戦前の女性エリートを輩出してきた主な領域が、当時から女性の職業継続が可能だった「教育」、女性としての「特性」が評価されやすい「芸術・文芸」、夫や父から家業を引き継ぐことが可能な『「家」型ビジネス』の3領域であることを指摘している。河野（1995）は、1994年までの全衆議院議員女性の経歴を男性のそれと比較し、①教育歴は男性に劣らず高いこと、②前職業経歴は文化的職業と教職が多い点で官公務員や大企業経営者が多い男性とは異なること、③結婚の影響として年長世代では夫の「身代わり」が多いことを解明している。

他方で、特定の女性エリートの人生を詳細に分析する質的研究も見られる。例えば小山（2008）は、鳩山春子、相馬黒光、神近市子の3人を中心に、戦前生まれの女性エリートによる自叙伝の記述を検討し、「女子中等教育は良妻賢母の育成を目標に掲げて」いたが、自叙伝を執筆するようなエリート女性たちはそうした学歴を自らの社会的地位に活かした少数派であったこと、当時女性が中等以上の教育を受けるには「経済的にも文化的にも恵まれた家庭環境、父母からの後押し、自らの勉学意欲」といった条件が整っている必要があったことを指摘している。上村（2012）は、奥むめおの人生の特徴を、「職業活動と社会活動が密接に関連を持ちつつ並立し、連鎖する複合キャリア」という観点から描き出している。

先行研究を概観すると、量的手法を用いた全体的傾向の分析か、社会活動家や文芸家の質的な事例の検討が中心であり、また結婚の影響についても国会議員の結婚歴の分析にとどまっている。これらをふまえ、戦前の女性エリートの輩出過程に関する課題として、少なくとも次の2点を挙げるができる。1つは芸術家や芸能家など学歴との関連が薄いキャリアルートも含めた、家庭環境、学歴、キャリアの相互関係の検討、もう1つは、結婚がキャリア形成に与

える影響の多角的な考察である。本稿では、これらに焦点を当てながら、小山（2008）と同様に自叙伝を材料として戦前の女性エリートの輩出過程をより具体的に検討し、同時代の男性著名人の輩出過程との比較考察も行いつつ、その諸特徴を明らかにする。

2. 分析の対象と方法

分析対象とするのは、日本経済新聞の「私の履歴書」シリーズに掲載された自叙伝のうち、明治・大正期に生まれ2021年6月末日までに亡くなった女性によって執筆された22点である¹⁾。これまでに筆者は、男性の経済エリートと文化エリートの輩出過程を明らかにするために「私の履歴書」を分析対象としてきた（多賀 2014, 2020a, 2020b, 2021；多賀・山口 2016）ことから、比較のしやすさを考え今回の分析対象も同様とした。また、対象者を大正期生まれまでとしたのは、それ以降の世代では、幼少期にすでに戦争が激化していたり、中等段階以降の教育を戦後の教育制度のもとで受けていたりして、それ以前の世代の輩出過程と単純には比較しにくいからである。

分析の手順としては、まず、自叙伝の記述から次の項目に関わる内容を抽出した。すなわち、（1）基本的属性（生年・没年月日、自叙伝執筆年齢、主な職歴、称号・栄典等）、（2）学校歴と職業経歴、（3）出自家族と教育環境（主な生育地、父母等の出自・学歴・職業等、きょうだい構成と出生順位、父母等による職業的意向と家庭教育の様子、家族・親族の経済資本・文化資本・社会関係資本）、（4）結婚と出産・子育て（恋愛・結婚・出産経験、キャリア形成に対する夫・結婚の影響、仕事と家庭との葛藤）である。

次に、それぞれの内容の要約を、各人物を行に、各項目を列に配置するマトリックス形式で一覧表にまとめた。この一覧表の特定の列の記述内容を縦にたどることで、ある項目に関する内容の分布や年代による変遷を確認し、特定の行の記述内容を横にたどることで、ある人物における各項目の特徴および項目相互の関連を確認することができる。これらの作業を繰り返すことで、後に本

關西大學『文學論集』第71巻第4号

表1 対象者のプロフィール

番号	氏名	生年	没年齢	自叙伝掲載年	掲載時年齢(執筆時)	肩書き(執筆時)	主な生源地(当時)	父母等の出自・学歴・職業等	出生順位等
①	平塚らいてう	1886 (明治19)	85	1967	81	全日本婦人団体連合会名誉会長	東京市麹町区→本郷区	【父】没落士族から、東京外国語学校を経て高級官僚(会計検査院)、一高講師/【母】御殿医の家系で経済的に裕福、父の海外渡航中、板井女塾、女子職業学校で学ぶ	3人姉妹の末子
②	神近市子	1888 (明治21)	93	1964	76	衆議院議員、社会党	長崎県北松浦郡佐々村	【父】長崎の地方の漢方医の家系、幼少期に父が死去/【母】困窮する中で医者を招聘したりして診療所を切り盛り	少なくとも兄2人、姉2人
③	東山千栄子	1890 (明治23)	89	1966	75	新劇女優	千葉県千葉市→仙台→横浜→養女になり東京市麹町区	【父】家老の家系、帝大法科卒、司法官、貴族院議員/【母】武士の娘で、兄らは天文学者、法学者、医学博士/【養父母】小2時時に母方の伯父(法学者)のもとに養女	10人きょうだいの3番目
④	市川房枝	1893 (明治26)	87	1960	67	参議院議員	愛知県中島郡明地村	【父】代々農業、本家格で土地持ち、かろうじて字が読める/【母】父方よりも財産のある農家出身だが字は読めなかった	男2人女4人の3女
⑤	奥むめお	1895 (明治28)	101	1958	62	参議院議員、主婦連会長	福井県福井市	【父】鍛冶屋/【母】病気がちで、むめおが女学校3年のときに死去	8人きょうだい、姉、兄、天逝した弟、4人の妹
⑥	山高しげり	1899 (明治32)	78	1975	76	全国地域婦人団体連絡協議会会長	三重県津→東京市本郷→群馬県前橋→三重県四日市→東京市小石川	【父】和歌山県士族、東京師範学校卒、三重県師範学校、群馬県女子師範学校校長、【母】東京師範学校女子部卒、兄を産むまで尋常師範学校訓導、父の死後再び教壇に立つ	4人きょうだいの3番目、姉、兄、妹
⑦	中村汀女	1900 (明治33)	88	1972	72	俳人	熊本県飽託郡画図村	【父】地主、画図村長/【母】細川家の枯筆の家系	言及なし
⑧	武原はん	1903 (明治36)	95	1977	74	舞踏家	徳島県徳島市→12歳で大阪	【父】ブリキ職人/【母】士族出身だが、継母に育てられ女中奉公に出される	8人きょうだいの長女、3人は天逝
⑨	円地文子	1905 (明治38)	81	1983	77	作家	東京市浅草区→麹町区	【父】東京帝大文科大学国語学教授/【母】記述なし	3人きょうだいの末っ子、兄、姉
⑩	平林たい子	1905 (明治38)	66	1966	61	作家	長野県諏訪郡中洲村	【父】祖父が製糸業を失敗して病死し困窮、朝鮮へ出稼ぎ/【母】父の出稼ぎ中、よろず屋を聞くが、母は兄とともに百姫、たい子がよろず屋を切り盛り	兄と2人?
⑪	天津乙女	1905 (明治38)	74	1976	71	宝塚歌劇団理事	東京市神田区小川町	【父】母の家に養子入り、東京外国語専門学校へ、小学校教師→株の売買→小林二三の世話で飯取百貨店に入社/【母】尾張藩の家系で芸事を好む家系	6人きょうだい(2男4女)の長女
⑫	井上八千代(四世家元)	1905 (明治38)	98	1959	54	京舞井上流家元	京都市東山区建仁寺町	【養母】2歳で祇園のお茶屋を経営する養母の養女に	養女としては1人
⑬	水谷八重子(初代)	1905 (明治38)	74	1970	64	新派女優	東京市牛込区神楽坂	【父・母】時計商、5歳のとき父が死去/【養兄】父の死後、母とともに姉夫婦のもとで暮らす。	三男二女の末っ子、兄3人は短命
⑭	杉村春子	1906 (明治39)	91	1968	62	新劇女優	広島県広島市	【養父母】花柳界近くで事業、小学5年で養父が死去	養女としては一入っ子
⑮	田中絹代	1909 (明治42)	67	1975	65	女優	山口県下関市	【父】下関の廻船問屋から呉服商、1歳のとき父が死去/【母】平家の血を引く武家で地所持ちの旧家出身、父の死後困窮	四男四女の末娘
⑯	長門美保	1911 (明治44)	83	1982	71	長門美保歌劇団会長	福岡県→ドイツ・ベルリン→東京・目白	【父】貿易関係の仕事	4姉妹の三女
⑰	春日野八千代	1915 (大正4)	96	1984	69	宝塚歌劇団理事	神戸→横浜→神戸→岡山県高梁→神戸→大阪で小学校卒	【父】高梁市の庄屋の家系。水害と祖父の死去により神戸で貿易商/【母】京都出身、どこかの藩の家老の家系	一人っ子
⑱	山口淑子	1920 (大正9)	94	2004	84	元参院議員	中国・奉天近郊で生まれ撫順で育つ→13歳で再び奉天→北京	【父】佐賀藩士族出身の漢学者家系。中国に渡り満鉄社員に中国語や中国事情を教える仕事/【母】福岡の廻船問屋出身、日本女子大卒業、家業が行き詰まり朝鮮、中国へ移住	言及なし
⑲	森光子	1920 (大正9)	92	2007	87	女優	京都市	【父】大阪の繊維会社跡取り、京都帝大出身。母親の間とは籍を入れず別の女性と結婚。母の死後しばらくで死去/【母】有樂川宮の乳母の家系。もと芸妓で、お金を貯めて旅館を始める。中学1年の夏に死去。	4人きょうだい長女、長兄天逝、次兄伯父の籍、妹1人、異母きょうだい6人
⑳	ミヤコ蝶々	1920 (大正9)	80	1998	77	女優	東京市日本橋区小伝馬町→神戸→旅芸人として全国を転々	【父】祖父から芸事を習わされて育つ。神戸ではデパートの家具部に勤務し家具店も経営/【生母】常磐津の師匠。祖父母の反対で入籍せず/【養母】芸者で父と駆け落ちし、彼女を引き取って育てる	弟と2人きょうだい、弟は生母が引き取る。
㉑	石井好子	1922 (大正11)	87	1991	68	歌手	東京市神田区→大森	【父】新聞社勤務から、後に衆議院議長を務めた政治家の石井光次郎/【母】日立コンツェルン形成に貢献した実業家で政治家の久原房之助の娘	4人きょうだい、次女
㉒	橋田壽賀子	1925 (大正14)	95	2019	94	脚本家	朝鮮・京城→東京→京城→大阪・堺	【父】朝鮮に渡り鉱山と土産物屋を経営/【母】農家の出身で父と結婚するために朝鮮に渡り土産物屋を切り盛り	一人っ子

近代日本における女性エリートの輩出過程に関する考察

—「私の履歴書」執筆者の事例から— (多賀)

学校歴	主な職歴	初期キャリアへの 父母等の賛同	恋愛・結婚・出産
小学校高等科→東京女師附属高等女学校→ 日本女子大学校→女子英学塾→正則英語学校	青鞥社設立、「青鞥」発刊(1911)、「新婦人協会」 設立(1919)、全日本夫人団体連合会名誉会長	○反対なし、支 援あり	画家の奥村博史と事実婚、一男一女をもうける
高等小学校→活水女学校→女子英学塾	青鞥社参加、東京日日新聞記者、作家活動、「女 人芸術」創刊参加、「婦人文藝」創刊、衆議院議 員5期	言及なし	恋愛関係のもつれから大杉栄を刺傷し服役、出獄 後、評論家の男性と結婚し子ども3人もうける が、後に離婚
小学校高等科二年→華族女学校→仏英和女学 校	新劇俳優、36歳で築地小劇場の研究生からスター ト、その後数多くの劇団で舞台俳優として活躍、 俳優会を創立	言及なし	20歳で、14歳年上、帝大法律出身で会員の 河野通久と結婚
高等小学校→女子学院中退→愛知県第二師範 学校校女子部→愛知県女子師範学校卒	名古屋新聞記者、国際労働機関職員、「新婦人協 会」設立(1919)、参議院議員5期	○反対なし	言及なし
師範付属小学校→福井高等女学校→日本女子 大学校卒	新婦人協会理事、「職業婦人社」設立「職業婦人」 発刊、日本生活協同組合連合会副会長、全国婦人 会館協議会会長、主婦連会長、参議院議員3期	○反対なし	25歳で結婚して、二人の子をもうけたが貧乏暮ら し
東京府立第二高等女学校→東京女子高等師範 学校(中退)	「国民新聞」記者、「主婦の友」記事執筆、全国地 域婦人団体連絡協議会会長、参議院議員2期	言及なし	20歳で早稲田大学講師の金子従次と結婚、翌年長 男を出産、後に離婚
熊本県立高等女学校入学(4年)→補習科1 年	高浜虚子と師事しホトトギス同人、俳誌「風花」 創刊(1947)、多くの句集出版	言及なし	中村重喜(五校から東大、官僚)と結婚、夫の転 勤に付いて各地転々、娘1人、息子2人
尋常小学校卒	舞踏家、上方舞の武原流の創設者、12歳から芸技 の世界へ	○了承	初恋のときと6年交際し別れ、東京の男性と結婚し たが、相手に靡りて身を立てたが幸せになれる と言われ協議離婚
東京高等師範学校付属小学校第二部→日本女 子大学付属高等女学校(中退)	作家、小山内薫の同人誌等、数々の戯曲を発表、 後に多くの文芸誌に小説を発表	○反対なし	東京日日新聞記者の円地と四松と結婚、一女をもう ける。
諏訪高等女学校卒	作家、東京市外電局職員、プロレタリア文学雑誌 「文藝戦線」の仲間と交流、プロレタリア作家と して評価を受ける	○反対なし	アナキストの山本虎三と同棲、小堀甚二と結婚 し、その後離婚
尋常小学校4年→5年から高等小学校→宝塚 少女歌劇養成会(在学中に宝塚音楽歌劇学校へ 改組)	宝塚(少女)歌劇団団員、日本舞踊名取に、宝塚 歌劇団理事として後進を指導	◎宝塚を受験さ せる	言及なし
尋常小学校卒	京舞井上流家元、11歳で舞妓、15歳で井上流名取、 18歳で「都をどり」企画、19歳で「女紅場」助教 員、26歳で正教員、34歳で家元代理	◎芸技になるの は自明	25歳のとき師匠の孫で能楽師の片山博通と結婚、 3人の息子をもうける。
小学校→双葉高等女学校卒	新派俳優、女学校在学中から舞台や映画に出演、 卒業後、舞台俳優、映画俳優として活動	◎父代わりの義 兄が積極的支援	十四代市守田勘彌と結婚、娘1人。娘は姉に引き とられて育てられる。後に円満離婚。
山中高等女学校(広島)卒。(東京音楽学校を 2度受験して不合格)	新劇俳優、広島女学院の音楽臨時教師、築地小劇 場、築地座、文芸座などで舞台俳優、映画にも出 演	△母は根拠欠 乏	医師の長広岸部と結婚したが結婚になり、彼女が 30歳のとき死去。長広の後輩にあたる石山孝彦と 再婚
尋常小学校卒	俳優、13歳で琵琶少女歌劇団俳優、14歳で松竹加 茂撮影所に入社し映画デビュー	△伯父の説得で 母が折れる	生涯独身
福国後半年遅れて日本女子大学付属豊明小学 校→日本女子大付属高等女学校→東京音楽学 校卒(首席)	オペラ歌手、戦中は軍慰問で声楽家として演奏、 戦後は夫と歌劇団を結成し国内外で活躍	◎積極的支援	軍の慰問に芸術家を派遣する仕事をしていた鈴木 雄詞と親しくなり結婚。
尋常小学校(各地転校)→宝塚音楽歌劇学校	宝塚歌劇団団員、宝塚歌劇団理事として後進を指 導	◎宝塚を受験さ せる	言及なし
中国撫順の小学校→撫順女学校→奉天女子商 業学校(転校し休学)→北京の娼教(イシヤ ウ)女学校(名門ミッションスクール)	戦前は「李香蘭」の名で「中国人」歌手・映画俳 優として活躍、戦後は「山口淑子」として映画俳 優やワイドショー司会者として活躍、後に参議院議 員3期	○反対なし	31歳で彫刻家のイサム・ノグチと結婚、5年後に 離婚。40歳で、外交官で8歳年下の大黒弘と結 婚、女優を引退して主婦に。
同心幼稚園→銅銭小学校→京都府立第一高等 女学校(1年日退学)	俳優、13歳で映画専攻生、20歳から女優を目指し て上京、戦時は慰問団で演奏、戦後は主に舞台 俳優、「放浪記」主人公の林美美子役やワイド ショーの司会等	△伯父に近い職 業を紹介	日系二世米国人の男性と結婚の手続きをしたが、 仕事で渡米できず、気持ちが悪くなって破綻。テレビ ディレクターの岡本愛彦と結婚、4年後に離婚。
地方巡業のため義務教育にも行っていない	俳優、7歳から家族で旅芸業、吉本興業入社、三 遊亭柳枝と劇団結成、上方トンボ(南都雄二)と 浅才および「夫婦善哉」の司会、映画出演、舞台 で脚本、演出、主演の3役をこなす	◎親の意向で芸 人に	三遊亭柳枝と結婚、浮気劇に我儘できず離婚。上 方トンボ(南都雄二)と結婚、夫の女性関係で離 婚
東京府立第六高等女学校→東京音楽大学卒	日本のシャンソン歌手の草分け、高等女学校音楽 講師、戦後ジャズバンド歌手、ニューヨーク、パ リで歌手活動、帰国後シャンソン歌手として活躍	◎積極的支援	学生の頃親の許しも得た婚約者がいたが病死。卒 業後父の勧めで実業家子息の日向正三と結婚する が4年後に離婚。再会した小学校の同級生井土通 夫と39歳で結婚
大阪府立豊岡高等女学校→日本女子大学校卒→ (東京大学受験不合格)→早稲田大学・国文科 から芸術科の演劇専攻に転科(中退)	脚本家、松竹最初の女性社員として脚本部所属、 34歳で退社し独立作家に、数多くのテレビドラマ の脚本を担当	×結婚させよう と進学も就職も 反対	41歳のときTBS社員の岩崎嘉一と結婚

論で述べる諸特徴を析出していった。

表1は、上述の仕方で分析に使用した一覧表の主な項目の内容を大幅に縮約して示したものである。本研究で分析対象とする自叙伝の執筆者22人の属性の傾向を見ておこう。端的にいうならば、これらの対象者全員が広義の「文化人」に相当するといえる。今回の対象者の抽出条件は、明治・大正期生まれの「私の履歴書」執筆者で2021年6月末日時点での女性物故者であり、職業上の制限は設けていない。しかし、結果的に全員が、少なくともキャリアの一時期において芸術家、芸能家、文芸家、社会活動家のいずれかを経験していた。確かに、神近市子、市川房枝、奥むめお、山口淑子の4人は、後期キャリアにおいて国会議員を務めており、政治エリートでもある。しかし、彼女らの前職はいずれも、女性の「特性」が評価されやすい(冠野 1995)とされる芸術家・芸能家・文芸家か、女性参政権や主婦といった女性に関わる社会活動家であり、ほぼ同世代の男性国会議員経験者の前職の典型とされる官公庁職員や公務員、大企業経営者(河野 1995)は1人もいない²⁾。

他方、文化的職業で占められていながらも、今回の条件に該当する女性美術家も皆無だった。「私の履歴書」を執筆した明治・大正期生まれの美術家男性が37人いる(多賀 2020b, 2021)のとは対照的である。

先行研究では、学歴が与える影響の観点から、女性エリートの主な輩出ルートとして、「業績主義的ルート」(学歴の地位形成手段としての意味合いが強い教育・研究職、専門職、官僚)、「属性主義的ルート」(学歴の地位表示的な意味合いが強い「家」型や父・夫の地位代替型のビジネスエリート)、「職業と学歴の関連が薄いルート」(芸術家・芸能家など)の3つのパターンが指摘されてきた(冠野 1996)。

これらを参考に、まずは全対象事例について学歴が初期キャリアに果たした機能(学歴—初期キャリア関連パターン)に着目して各事例の輩出ルートを検討したところ、明らかに属性主義的ルートに該当すると判断される事例は1つも見られなかった。これには、今回の対象者たちには、属性主義的ルートに典

型的な「家」型・地位代替型のビジネスエリートがいなかったことの影響が大きいといえるだろう。また、業績主義的ルートに典型的な教育・研究職、専門職、官僚に相当する対象者も1人もいなかった。ただし、後で示すように、音楽学校を卒業した音楽家のように、学歴と職業との関連が密接な例や、文筆家や文芸家のように、必ずしも学歴を必要としないが、職業的能力の基礎として中等教育以上の学校教育が明らかに効いていると考えられる事例は多く見られた。

これらをふまえ、本稿では、以下の点に焦点を当てながら22人の対象者の輩出過程のより具体的な側面を明らかにしていく。まず、初期キャリアを中心に、職業キャリアにつながる基礎的素養をどこでいかにして習得したのかについて、学歴パターン、家族・親族の影響（文化資本・社会関係資本・経済資本・家族の意向）、学校外教育、職務内訓練に着目しながら具体的に確認をしていく。複数の職業キャリアを有し、職業を一種に特定することが難しい対象者もいるが、初期の中心的な職業に基づき、さしあたり文芸家・文筆家、音楽家、芸家の3種類に分けて考察を進めていく。続いて、後期キャリアも含めて結婚がキャリア形成に与えた影響に関して、ポジティブな側面とネガティブな側面の両面から典型的な事例を中心に検討を行う。最後に、これまでに筆者が行った同時代の男性エリートの分析から得られた知見との比較考察を行う。

3. 文筆家・文芸家の輩出過程

まず、広義の文筆家・文芸家として9人の輩出過程を検討しよう。社会活動家や国会議員として著名な者も含まれているが、いずれもキャリアの初期において文筆活動を足がかりにその後のキャリアを発展させていることから、ここでは文筆家・文芸家の括りで検討を行う。結論を先に述べるならば、彼女らの輩出過程を横断的に検討した結果、当時としては異例の高学歴であり、多くは文化資本と経済資本に恵まれた家庭環境のもとで親による支援が得られているという点で、先述の小山（2008）の指摘と同様の傾向がうかがえる。しかしそ

れに加えてもう1点、全員が少なくとも一時期東京で教育を受けたりキャリアを磨いたりする機会を得ていたという地理的な共通点も見出された。彼女らの学歴パターンはかなり似通っており、しかも経歴についてよく知られている者も多いことから、個別の詳細な経歴については表1に委ね、ここでは共通する傾向についていくつかの事例に簡単に触れながら述べる。なお、以下で対象者氏名の前についている丸囲みの数字は、表1の対象者番号に対応している。

学歴ルート

彼女らの学歴は、当時の女性としては極めて高く、9人全員が高等女学校で学んでいる。⑦中村汀女と⑩平林たい子は、それぞれの出身地の高等女学校を卒業。④市川房枝は、愛知から一旦東京に出て女子学院に通うが、キリスト教になじみず中退し、郷里の第二師範学校女子部を卒業している。⑨円地文子は日本女子大付属高等女学校に入るが、学校の勉強に意味を見いだせなくなり、退学して英語、フランス語、漢文を個人教授で学んでいる。

それ以外の5人は、さらに高等教育機関でも学んでいる。⑫橋田壽賀子は、大阪府立堺高等女学校から日本女子大進んで国文学を専攻し、さらに早稲田大学文学部国文科入学後、歌舞伎研究の河竹繁俊のいた芸術科へ転科している。①平塚らいてうと⑤奥むめおは、ともに日本女子大進んでいる。二人とも専攻は家政だが、平塚はさらに女子英学塾や正則英語学校などで英語を、二松学舎で漢文も学んでおり、奥は授業よりも図書館に通って手当たり次第に本を読んでいたと記している。②神近市子も女子英学塾で学び、⑥山高しげりは、兄の死や本人の病気で中退したものの、東京女子高等師範学校で学んでいる。

義務教育が小学校だけであった戦前期には、女性の中等教育への進学率は極めて低く、その中でも女性に普通教育を施す高等女学校への進学率は、高等女学校令が施行された明治32(1899)年直後は5%にも満たず、大正14(1925)年でもせいぜい15%程度であった。さらに、女性の大学への進学が実質的に不

可能であった当時、女子高等師範学校や女子専門学校などの高等教育機関への女性の進学率は、戦前期を通して1%にも満たなかった(稲垣 2007: 4-7)。そうした当時の状況下での対象者らの学歴の高さは際立っている。ただし、必ずしも学歴が必要でないにも関わらず、文芸家の学歴が男女を問わず極めて高い傾向は、すでに先行研究でも指摘されている(山内 1995, 中村 2018)。近代学校制度のもとでの教育課程と、文筆・文芸家として活躍するために必要な高度なりテラシーとの親和性の高さを考えれば理に適った結果ともいえる。

家庭環境

文化資本と経済資本に恵まれた家庭の出身が多いことも対象となった文筆家・文芸家の多くに共通する特徴である。①平塚らいてう、⑥山高しげり、⑨円地文子は、親が大学、専門学校、師範学校などを卒業した高学歴の新中間層の出身である。他方で、地方の旧中間層出身者も多い。⑦中村汀女の父は地主で村長、母は細川家の祐筆の家系、④市川房枝の家は農業だが本家格で土地持ち、⑤奥むめおの家は住み込みの奉公人が何人もいる鍛冶屋を営み、父は読書家で後に市議会議員も務めている。②神近市子の家庭は、経済的には困窮していたものの、漢方医の家系で親族から経済的な支援を受けている。

義務教育が小学校までだった時代に、子どもを中等教育機関、さらには高等教育機関まで進学させるには、家庭においてそれを可能にする経済的な余裕や、学校教育を重視する文化的環境が重要であることはある程度想像がつく。しかし、良妻賢母主義を旨とする高等女学校で学び、良家の嫁になることが中間層以上の女性に望まれる一般的なライフコースとされていた当時、どのようにして、彼女らは自叙伝を残すほどの職業キャリアを発展させる方向へと進むことができたのか。彼女らの事例からは、親が進学や職業キャリアを積極的に支援してくれていたたり、仮に親に反対されても、粘り強く自分の希望に向かって親と交渉したりしている様子がうかがえた。

いくつかの事例では、父親が積極的に娘の学歴取得やキャリア形成を応援し

ていた。例えば、④市川房枝の父は土地持ちの農家でかろうじて字が読める程度だったが、「自分は学問がないので苦勞した。子どもたちには勉強させてやる」として娘も含めた子どもの教育に情熱を注いでいる。長野の農家で一時期朝鮮に出稼ぎに行った⑩平林たい子の父は、彼女を政治家にしたいと考えており、彼女が女学校卒業後に東京に出る折には「女賊になるにしても、一流の女賊になれ」とささやいたという。

一方、平塚らいてうや奥むめおの父は、一旦は彼女らが高等教育機関に進むことに反対するが、最終的には認めて支援している。⑤奥むめおは、縁談を断り日本女子大に入学しようとして父と不仲になるが、子どもたちの教育に非常に熱心で、かつては「お前たちはどこまでも上の学校に出してやるからしっかり勉強せい」「嫁になんぞ行くな。嫁に行っても女には少しもいいことはない」と言っていた鍛冶屋経営者で市議会議員の父を説得し、進学を認めさせている。①平塚らいてうは、日本女子大進学の際、英文科に入ろうとして父から反対されるが、彼女の「いよいよとなれば、勝手に入学手続をとるぐらいの、思いつめた気持ち」と母のとりなしによって家政科への入学を許されている。その後も彼女は、学費や「青鞥」の出版費用の一部を母に補ってもらっている。

⑫橋田壽賀子は、親からの度重なる反対をはねのけながらキャリアを築いている。まず、女学校卒業後に結婚させようとする親に内緒で日本女子大を受験して合格し、東京の叔母が母を説得して入学が許されている。女子大卒業後も結婚を勧められるのがいやで早稲田大学を受験して合格、在学中には松竹脚本部初の女性部員に採用されるが、ここでも親が反対して合格取消を願う手紙を松竹へ送っている。この時は、家から通える京都の撮影所に配属されることで松竹にとどまることができたが、結果早稲田を中退せざるを得なくなっている。

東京での教育と初期キャリア

文筆家・文芸家の彼女らにさらに共通しているのが、9人全員がキャリアの初期に東京での仕事や活動を経験していることである。①平塚らいてうと⑨円

地文子は、東京で生まれ育ち、東京の教育機関で学んでそのまま東京でキャリアを開始している。⑥山高しげりも、各地を転々としながらも一時期東京で暮らし、東京の教育機関で学び東京で初職を得ている。他方、②神近市子、④市川房枝、⑤奥むめお、⑩平林たい子、⑫橋田壽賀子の5人は地方出身だが、いずれも郷里の高等女学校を経て、東京の高等教育機関に進学したり、キャリアの初期に東京で職を得ている。⑦中村汀女は、結婚を機に熊本から夫の任地だった東京に移り、婦人句会に参加している。

自叙伝を残した男性エリートのうち、教育や初期の職業的訓練を東京で受けている割合が圧倒的に高い傾向は、男性の美術家、とりわけ画家において顕著であった。美術家の場合、養成過程における東京美術学校の地位は別格であり、ほとんどの同業者コミュニティが東京に集中していたことが大きく影響していると考えられる(多賀 2020b)。文筆家・文芸家においても同様に、同業者同士が直接やりとりしながら人脈を築き能力を高めていくうえで、同人誌などのコミュニティや新聞社・出版社が集中する東京は特別な地域であったことと、特に女性にとっては、高等教育機関で学べる機会は男性以上にほぼ東京に限られていたことが、こうした結果に反映されているのではないだろうか。このことは、神近市子の例に象徴されている。「作家になるには東京での勉強が必要」と考えていた彼女は、親や親族が早く結婚させようとするなかで初恋の九州の男性との縁談を断っているが、それについて彼女は、「理由は簡単だった。九州の僻地では、小説書きになれる見込みはないからだった」と述べている。

4. 音楽家の輩出過程

次に、広義の音楽家として、5人の事例を検討する。うち最初の4人は、今回の対象者の中で、キャリアと学歴との関係が最も強いと判断される事例である。特に、天津乙女と春日野八千代が学んだ宝塚音楽歌劇学校は、当時文部省の認可を受けた私立学校ではあったが、宝塚歌劇団と一体の劇団員の養成所と

しての性格を持ち合わせており、そこで学ぶことは劇団員としてキャリアを築くための必須要件だった³⁾。また、ともに東京音楽学校卒の長門美保と石井好子の場合も、プロの歌手として活躍するうえで必須要件ではないものの、そうした学歴がキャリアに直結していることは疑いない。そこで、ここでは彼女らが狭き門をくぐり抜けてそれらの学歴を手に入れるまでの時期に焦点を当て、各事例を個別に検討していこう。

⑯**長門美保**は福岡県で生まれるが、父親の貿易関係の仕事のため3歳のときに父に付いて母と3人の姉妹とともにドイツに渡り、小学校に入るまでベルリンで暮らしている。その間、父にオペラや音楽会に連れて行かれ、ピアノを習い、小学生の頃には、東京音楽学校に進んで声楽家になりたいと思うようになる。彼女を童謡歌手としてデビューさせる誘いが来たときには父が「子供のうちは、そんなことはさせない」と断り、浅草の大衆芸能や活動写真は厳禁だったなどの記述からは、父が、彼女を西洋古典音楽の道に進ませるために、大衆文化から遠ざけようとしていた様子がうかがえる。また、初等中等教育における独自の教育環境も音楽の道に進む上で奏功したようだ。ドイツからの帰国後、彼女は日本女子大付属豊明小学校に半年遅れで編入し、その後日本女子大付属高等女学校に進学する。彼女は、東京音楽学校の受験に備えるうえで、創立者成瀬仁蔵の進める「当時の日本では考えられないほどの自由な教育方針」に随分助けられたことを記している。

もう1人の音楽家⑳**石井好子**は、文化的にも経済的にも非常に恵まれた東京の家庭に4人きょうだいの次女として生まれている。父は後に衆議院議長を務めた政治家の石井光次郎、母は日立コンツェルン形成に貢献した実業家で政治家の久原房之助の娘である。父は音楽に興味を持たなかったが、母は若い頃に長唄、三味線を習い、後にピアノも習っている。母は「女性は独立した力を持たねば、いざという時不幸になる」という考えを持っており、彼女を音楽家にしようと6歳から音楽学校出身の教師のもとでピアノを習わせている。彼女はピアノをなかなか好きになれなかったが、ピアノ教師が歌を勧めてくれたおかげ

げで音楽を嫌いになることなく、その後高等女学校を経て東京音楽学校の声楽科に入学している。

このように、二人とも、音楽家としてのキャリアに直結する学歴ルートに乗るまでに、一流の音楽に触れさせられたり質の高い学校外の音楽教育を与えられたりする家族の文化資本や経済資本、そして音楽の道に進むことを許容したり勧めたりする親の意向という点で、出自家族の環境が学歴取得に非常に大きく効いている。

次に、宝塚歌劇団出身の天津乙女と春日野八千代の事例を確認しよう。2人は10歳年が離れているが、ともに宝塚音楽歌劇学校を経て宝塚歌劇団団員となり、後年は理事を務めて後進の指導に尽力し、紫綬褒章、勲四等宝冠章を受章している。彼女らの学歴取得においてもやはり親の人脈や意向が非常に強く効いている。

⑪**天津乙女**は東京市生まれ。父は小学校教師や株の売買に関わる仕事を経て、阪急東宝グループの創業者であり宝塚歌劇団の創設者でもある小林一三の世話で阪急百貨店に入社している。父も母も芝居が好きで、数え3歳頃の彼女をよく新派劇や歌舞伎などを見に連れて行っている。両親が彼女に宝塚を受験させる気になった理由は、彼女が「物売り商のまねをするのが得意で、人から『芸ごとに向いている』といわれ」たことと、演芸誌「新演芸」や婦人誌「新家庭」を発行していた玄文社主幹の結城礼一郎から病弱な体質を改善するのによいと勧められたことだという。こうして彼女は、結城の口添えで初の東京出身者として特別受験をして宝塚少女歌劇養成会に入学している（在学中に宝塚音楽歌劇学校へ改組）。

もう一人の宝塚歌劇団出身者である⑫**春日野八千代**は、父の仕事の関係で神戸、横浜、岡山などを転々として大阪で小学校を卒業後に宝塚に入っている。父親はもともと、彼女を大阪府立市岡高等女学校へ入れ、奈良女子高等師範学校に進ませて教師にしたかったが、考えを変えて彼女を宝塚に入れることにした。その理由として、彼女は次の3点を記している。①「昭和初頭の不景気で

父の仕事も思わしくなかった」こと、②尊敬する小林一三がつくった宝塚少女歌劇団に父も興味を持っていたこと、③普通の女学校と同様の科目に加えてダンスや日本舞踊も含むカリキュラムが虚弱体質の彼女に適していると父が考えたことである。そして、担任教員や親戚からの猛反対を受けるなか、彼女は宝塚音楽歌劇学校を受験し、約14倍の難関を突破して合格している。

広義の音楽家の最後の事例として取り上げるのは⑩山口淑子である。上記の4人とは異なり、彼女は専門教育機関で音楽を学ぶことなく歌手としてデビューしている。彼女は、1920（大正9）年、中国の奉天で生まれ撫順で育っている。父は佐賀藩士族出身の漢学者の家に生まれて中国に渡って語学を学び、彼女が生まれたときには中国の満州鉄道で社員に中国語や中国事情を教えていた。小学校に上がると彼女も本格的に中国語の勉強をさせられ、毎晩大人の社員に混じって父が北京官話を教えているのを聞いていた。さらに、父と懇意だった親日家の李際春將軍と儀礼的な養子縁組をして「李香蘭」の名前をもらい、後に李將軍の第二夫人から北京語を習って日常会話には不自由なくなっている。一方、音楽に関しては、日本女子大校卒の母の意向で、幼少期からバイオリン、ピアノ、琴を習っていた。肺浸潤を患い、快復後に呼吸器系を鍛えよという医師からの勧めにしたがって声楽を始めた際には、帝政ロシアのオペラ座で活躍した歌手ポドレソフから指導を受ける。そして、ポドレソフの前座で歌ったところ、ラジオ局の目にとまり、北京官話が話せて譜面が読めて日本語もわかる「中国人少女歌手」の李香蘭として13歳でデビューすることになる。文化・経済・社会関係資本に恵まれた生育環境を通して、中国語の語学力をはじめとして音楽に限らない様々な文化的素養を身につけていたことが、彼女の初期キャリアを可能にしたといえるだろう。

このように、これらの女性音楽家たちの事例はいずれも、先述の文筆家・文芸家たちに勝るとも劣らないほど文化・経済・社会関係資本に恵まれた家庭環境が初期キャリアに効いている事例である。

5. 芸能家の輩出過程

初期キャリアの形成パターンを検討する最後のグループとして、芸能家の例を検討しよう。うち東山千栄子と杉村春子は、2人とも成人後に築地小劇場の研究生を経て俳優となっているので、ここではそれ以外の6人の事例を扱う。彼女らは、幼少期から学校教育とは別の場で職業につながる教育・訓練を受け、遅くとも十代前半までに芸能家としての初期キャリアを開始しており、いずれも学歴と初期キャリア形成との関連は極めて薄い。ただし、芸能の道に進むようになったきっかけや、そのことに対する親の意向、芸能の訓練を学校に通いながら受けたのか学校修了後に受けたのかなど、キャリアを開始するまでの道筋はそれぞれ異なっており、先述の文筆・文芸家や音楽家ほどには、輩出過程における共通性が見られない。そこで、ここでも個別に事例を確認する。

まずは、舞踏家の2人の事例から検討しよう。本人が物心つく前にその道に進むことがいわば定めとされその通りに進んできた事例が、舞踏家の⑫井上八千代（四世家元）である。彼女は、2歳のときに京都の祇園のお茶屋に預けられ、生家のことを知らないままお茶屋の養母を本当の親だと思って育つ。4歳の時、養母に連れられて先代（三世家元井上八千代）に入門し、11歳で養家のお茶屋から舞妓になるようになる。当時義務教育は小学校の6年間だったが、彼女が通った小学校では4年間通った後2年間「女紅場」（当時の知事や地元の有力者らが作った芸妓の「職業訓練所のようなもの」）に通えば小学校を卒業したことにされており、彼女もそのコースをたどっている。その間も、彼女は日曜を除く毎日師匠のところに通い、13歳のときには内弟子となって師匠の家で暮らしながらさらに厳しい稽古に励んでいる。そうした苦勞の末、15歳で井上流名取、18歳で「都をどり」企画を務めるに至る。

一方、もう一人の舞踏家⑧武原はんも、芸妓からキャリアをスタートさせている点では井上八千代と共通しているが、武原の場合、幼少期には芸事の専門的な訓練はほとんど受けておらず、12歳のときに親の意向ではなく自ら働き口

を求めて芸妓の道に進んでいる。彼女は徳島市で、ブリキ職人の父と士族出身だが継母に育てられ女中奉公中に父と知り合った母との間に、8人きょうだいの長女として生まれている。彼女が小学5年のときに、母の兄を頼って一家で大阪へ移り現地の小学校に転校したが、「子だくさんの貧乏所帯」で生活は決して楽ではなかった。子ども心になんとか働かなければならないと考え、自分にできる仕事といえば「子供のころに遊びで覚えた三味線、唄、踊り」しか浮かばず「芸者を選ぶことにした」という。自ら受け入れてくれるお茶屋を見つけ、両親も納得したうえで採用され、2年後に14歳で一本立ちしている。

次に、俳優の3人の事例を検討しよう。俳優の⑬田中絹代も、自ら志願して芸能の道に進んでいる点では先述の武原の入職パターンと似ているが、小学生のときから学校外教育を通してある程度の職業的素養を身につけている点や、初期キャリアに家族の人脈が効いている点は武原と異なっている。彼女は、山口県の下関生まれ。1歳の時に父が亡くなり困窮するが、その後は地所持ちの旧家の家系である母の兄が父代わりとなって面倒を見ており、6歳のときに一家で大阪の伯父の家に身を寄せることになる。学校外教育としては、当時の中流家庭で娘の稽古事として習わせるのが流行っていた筑前琵琶を彼女も習い、その師匠が「宝塚少女歌劇に対抗しよう」として組織した「十歳未満の少女ばかりを集めた歌劇団」の公演で、彼女は主役を演じる「スター」だった。一方学校教育に関しては、明治大学の第一回卒業生の伯父の教育のおかげで小学四年の頃には優等生となるが、学校で琵琶の本を読んでいるのをとがめられたのがきっかけで、学校へは行かなくなってしまう。その後琵琶歌劇の公演地である大阪の娛樂街の映画館に通ううち、映画の世界に魅了され、女優になることを決意する。当時は役者を蔑む風潮が残っており、母からは「平家の流れを引く由緒ある家門から、そんな者が出せるものか」として猛反対されるが、伯父が1年半かけて母を説得。松竹キネマの大阪支局に勤めていた兄の伝手で京都の下加茂撮影所への入門が許され、14歳で本格的に映画の世界に入っている。

⑭水谷八重子(初代)も、すでに小学生のときから日本舞踊を習ったり、劇

団に出入りして職務内訓練的に芸能活動を開始するなどの点で、井上や田中のパターンに比較的近いが、十代前半までに芸能家としてキャリアを開始した6人のなかで唯一、彼女だけが中等教育を修了している。彼女は、東京市牛込区で時計商を営む両親の元に三男二女の末子として生まれるが、5歳のとき父が亡くなり、兄3人が短命で姉はすでに嫁いでいたため、母と二人で姉夫婦のもとに身を寄せることになる。義兄は早稲田で坪内逍遙に師事しており、坪内が「文芸協会」を立ち上げた際には義兄も参加。さらに「文芸協会」を退団した島村抱月と松井須磨子が「芸術座」を旗揚げすると、坪内の了解を得て兄もその事務を担当している。彼女は9歳の頃から義兄について稽古場へ遊びに行き、ときどき舞台にも立たせてもらうようになる。そして12歳のとき、芸術座の帝劇公演、トルストイ作の「アンナ・カレーニナ」の子役で初めて水谷八重子の芸名を使って本格的な初舞台を踏んでいる。小学校卒業後には雙葉女学園に入学するが、在学中にも「新劇協会」からメーテルリンクの「青い鳥」への出演を依頼されたり、映画「寒椿」に出演するなど芸能活動を続ける。規律の厳格な学校側から出演を打ち切らなければ退学するよう迫られるが、義兄の尽力と好成績のおかげで退学を免れ、職業とほとんど関係のない女学校での学業を成し遂げて卒業している。

10代前半で芸能家デビューを果たしたもう1人の俳優^⑩森光子は、もともとは井上八千代と事情が近く、芸妓となって家を継ぐこととされていたが、そのために抵抗して映画界でキャリアを開始している。彼女は、1920（大正9）年に、京都で割烹旅館を営む元芸妓で未婚の母のもとに生まれる。同居の伯父の長男が「鞍馬天狗」で有名な俳優の嵐寛寿郎で、旅館には全盛期の阪東妻三郎がよく遊びに来るなど、映画や歌舞伎など芸能の世界を肌で感じる環境で育っている。親からは、舞妓になって将来は旅館の女将を継ぐことを期待され、伝統芸能の世界のしきたりに従って6歳6月6日から日本舞踊の若柳流の師匠のもとに通わされていた。しかし彼女は、東京の松竹歌劇団にあこがれ、東京に行かせられないと言われると、今度は宝塚少女歌劇に希望を変え、一旦はそれ

を母に認めさせている。小学校卒業後は京都府内トップ校の府立第一高等女学校に合格するが、1年生の夏に母が結核で亡くなり、学校に行くのが嫌になって1学期で退学。父親代わりとなった伯父は、旅館の跡を継ぐことへの彼女の抵抗に屈し、宝塚の受験は認めなかったものの、息子の嵐寛寿郎の伝手で映画界を紹介。彼女は「鞍馬天狗の姪」（本当は従妹）として12歳で映画界に入り、2年後にデビューを果たす。

⑳ **ミヤコ蝶々**も、家業として親とともに幼少期に芸能活動を開始しているが、彼女の場合は、もともと芸事が家業だったというよりも、彼女の才能に親が賭けて芸事を家業として始め、いわば職務内訓練の形で養成されている。また、学歴の点では、義務教育の学校にも全く通っていない点で特徴的である。彼女は、1920（大正9）年、東京市日本橋区に、家具屋を営み「素人芸とはいえ新内の名取」で横山エンタツらの芸人とも懇意だった父と、常磐津の師匠だった実母との間に長女として生まれる。すぐに両親は別れ、父は神戸でデパートの家具部に勤務しながら家具店も経営するようになるが、その際彼女は父に引き取られ、元芸者だった父の後妻（彼女の義母）ともども神戸に移住する。神戸では、彼女の家いろいろな芸人が訪ねてきたり、父に寄席や楽屋に連れて行かれたりするうち、彼女は「見ようみまね」で「様々な芸のまねごとをする」までになった。そうした彼女の姿を見た両親は、彼女を「一人前の芸人にしたい」と思うに至り、横山エンタツに相談のうえ、家具屋を畳んで7歳の彼女を座長にして旅回りの一座を持つことになる。全くの素人からキャリアをスタートさせた彼女は、義母や一座の他の芸人たちから芸の本格的な指導を受けている。旅続きの生活のため、彼女は当時義務教育だった小学校にさえ全く行っていないが、義母が、三味線や踊りだけでなく、読み書きや九九なども厳しく指導した。他方父は、具体的な芸の指導は行わず、「芸人の心構えを繰り返し説いていた」。「朝から三味線に日舞、洋舞、唄（うた）や漫才のけいこ、それに（中略）読み書きの勉強と、びっしり予定が詰まっていて、遊ぶ時間は二時間ほどしかない」という子ども時代を経て、20歳過ぎで吉本興業にスカウ

トされるまで、彼女は地方巡業を続けている。

6. 結婚とキャリア形成

これまでは、初期キャリアに焦点を当て、彼女らの職業キャリアにつながる基礎的素養を習得するうえでの家庭環境と学校教育の影響を中心に検討してきたが、ここでは、後期キャリアも含めて結婚とキャリアとの関係について見ていこう。22人の対象者のうち、結婚（事実婚も含む）経験について記述があったのは18人である。検討の結果、ネガティブであれポジティブであれその両方であれ、多くの例で、結婚生活が彼女らのキャリア形成に少なからぬ影響を及ぼしている様子が見えがえた。

結婚のキャリア形成促進効果

今回の対象者の中には、結婚後も夫とともに仕事をしたり、夫に仕事を支えてもらったりしていた事例がいくつも見られた。⑬**水谷八重子**は、娘を姉に育ててもらいながら、歌舞伎俳優の夫とそれぞれのキャリアを追い求めながらも、戦前には夫と一緒に地方巡業をして夫が彼女の興業を支えてくれることもあった。⑯**長門美保**は、結婚前にすでに一定のキャリアを築いていたが、戦前に軍の慰問に芸術家を派遣する仕事をしていた夫と親しくなって結婚し、戦後に歌劇団を結成すると夫がマネジメントをして彼女の興業を支えている。⑳**ミヤコ蝶々**も、地方巡業から吉本興業に入り初期キャリアを築いた後に、1人目の夫と結婚し、終戦後に劇団を作って一緒に地方を巡業している。彼と離婚すると、後に「上方トンボ」「南都雄二」の芸名で活躍する夫と結婚。後に2番目の夫とも離婚するが、彼が亡くなるまでの20年間、ラジオ・テレビのトーク番組「夫婦善哉」の司会を一緒に務めている。㉑**石井好子**は、東京音楽学校卒業後に、父の薦めで実業家の息子だった1人目の夫と結婚し、戦後は夫の出資とマネジメントによるジャズバンドで歌手として初期キャリアを築いている。㉒**橋田壽賀子**の場合、テレビ局社員だった夫は、結婚当初こそ彼女のキャリア

を支援するどころか彼女に家事役割を強く求めていたが、55歳で定年してから自身が亡くなるまでは、彼女のマネジメントを一手に引き受けている。

他方、夫が直接的にキャリアを支えたとの記述は見られないが、結婚生活が間接的に彼女らのキャリア形成に影響を与えていると推測されるケースもある。結婚して二人の子どもをもうけた⑤奥むめおや事実婚で一男一女をもうけた①平塚らいてうの場合、結婚・出産・育児等の生活実感が、少なくとも部分的には主婦連、あるいは母性保護といった彼女らの活動の基盤をなしただろうし、⑩平林たい子についても、アナキストとの同棲や「現世的なものへの反逆のつもり」で「いままでの結婚の規準をすべて逆に」した男性を「わざと選んだ」という結婚生活での経験が、彼女の創作活動に各所で活かされているとも考えられる。⑨円地文子の場合、夫は古風な考え方で妻に職業を持たせることも好きではなく「恐らく子供ができていなかったら離婚していた」というが、彼女自身が記しているように、皮肉にもそうした夫婦生活への不満が小説執筆へと彼女を向かわせキャリアの成功へと導いている。

また、先述の⑫橋田壽賀子においても、意図せざる形で結婚がキャリアを促進させている側面が垣間見える。夫は会社員時代は「結婚したら俺の前では原稿用紙を広げるな」「主婦業をこなすのが第一で、余裕があれば脚本を書いてもいい」という考え方だったが、彼女は「結婚してもらった」と思っていたから夫に従うことに抵抗はなかったという。そして、「結婚している間が一番仕事がかどった。夫の前では原稿用紙を広げない約束があったし、夫が戻れば食事の支度に晩酌の相手と仕事どころではない。だから夫が戻るまで必死で鉛筆を走らせた」とさえ述べている。

結婚生活とキャリアとの葛藤

結婚生活が様々な形で彼女らのキャリア形成を促進させた側面が見られる一方で、彼女らの多くが結婚生活とキャリア形成との葛藤に苦しんでいた様子もうかがえ、キャリアを守るために離婚を余儀なくされた事例も見られる。

⑫井上八千代は、離婚こそしていないものの、職業キャリアと結婚生活の両立に関する切実な悩みを吐露している。彼女の夫は先代の孫にあたる能楽師であり、結婚の際に夫の母から「二つ仕事を持たんならんことになるができるか」と聞かれて「十分できます」と答えたものの、「いまからふりかえてみると、やっぱり無理なことだと思います」と記している。そして、「なんとか主人の芸を守り、自分の芸を育て、それから主婦の務めを果たしていくというあぶない綱渡りをしてきましたが、奥さんとしてはしようのない奥さんだっと思います」と述べ、夫の後を継いだ能楽師の長男には「なにも仕事をもたない、ほんとうに主人につかえるだけの嫁がほしいと思ってその通りに」したという。

離婚経験者のすべてが仕事と結婚生活の葛藤を原因として離婚しているわけではないが、そうした葛藤の末、離婚してキャリアを守った事例も見られる。⑧武原はんは、東京のある男性と結婚したが、彼女の踊りに対する執念を見抜いた夫から、踊りで身を立てた方が幸せになれると言われ、協議離婚に至っている。⑩山口淑子は、戦後の俳優業が中心だった時代に日系アメリカ人の彫刻家と結婚しているが、当初から「お互いの仕事に支障をきたしたら別れましょう」という約束をしており、「同じ時間をもとうとすれば、どちらかが何かを捨てなければならぬ」い生活を送るなか、5年後に離婚している。⑨森光子は、テレビディレクターの夫と結婚した翌々年に舞台「放浪記」の主役に抜擢され、「主婦の仕事もこなすつもりだったのに、家事は十分にできず、「げっそりやせ、夫婦の会話が次第になくなってい」くなかで、結婚4年で夫から離婚を告げられている。彼女は、「放浪記」の劇作家菊田一夫から「両立するわけないよ。絶対にしない。だからいいんだよ」と言われ、「その言葉に救われる思いだった。それからは女優に徹する気持ちがいよいよ強くなった」と述べている。⑬水谷八重子は、先述のように戦前は姉に子どもを預けて夫婦それぞれがキャリアを追求する生活を送っていたが、疎開中に一旦キャリアを中断し主婦の役割を務めた後に、戦後再び俳優に復帰して戦前以上に仕事に拘束され「妻の責務に時間をさけなくなった」ことで葛藤を抱えるようになる。夫はそうし

た妻を責めるわけではなく彼女の「苦しみをいちばん理解してくれた」が、「舞台と家庭を両立させようとあがきながら、くずれ折れそうになる自分が歯がゆく、夫にわびたい気持ちばかり広がる」状況のなか、夫と話し合い円満離婚に至っている。

これらはいずれも、彼女らが、平等主義的な価値にコミットして夫が彼女らのキャリアを支えてくれないことに不満を抱いていたというよりも、主婦としての役割を自明視したうえで、それが果たせず夫（の家）に申し訳なく感じて葛藤している様子を記したものである。こうした記述スタイルの特徴については、それらの葛藤を抱えていた当時の時代背景だけでなく、自叙伝執筆当時の時代状況や読者からの受け止められ方を意識したことも影響しているかもしれない。

結婚に媒介された教育の効果

最後に、幼少期からの教育が結婚に媒介される形で後のキャリア形成に効果を及ぼしていると考えられるユニークな事例として、④**東山千栄子**の例を見てみよう。彼女は千葉市生まれ。父は、家老職の家系で帝国大学法科を出て司法官、貴族院議員を務めており、母は武士の娘で、母方の伯父らは、天文学者、法学者、医学博士だった。父の転勤に伴って仙台、横浜で暮らした後、小学2年生が終わるときに、東京市麴町区に住む法学者である母方の伯父のところに養女に出される。彼女を「外交官の妻」にさせようとする養母のもと、彼女は小学校卒業後、華族女学校（後の学習院女学部）に通いながら双葉会（雙葉学園の前身）でフランスと英語を、学習院卒業後も高等女子仏英和学校（白百合女子大学の前身）でフランス語を学びながら、「お茶、お花、お裁縫、お料理……と花嫁修業に明け暮れ」る生活を送る。かぞえ20歳のときに帝国大学法科出身で生糸輸出などを手がける会社の当時モスクワ支店長だった男性との縁談がきて結婚。夫は「青年時代に正岡子規のもとで俳句を学」び、「文学や音楽に深い興味を持って」おり、彼女より14歳年上だった。こうして彼女は、夫

に随行してモスクワで支店長妻として8年間生活。途中、フランスに留学したり、夫から小説について教わったり、バレエやオペラに連れて行ってもらったり、さらにはモスクワ芸術座で芝居を見るなど、最高級の文化・芸術に浸る生活を8年間送っている。その後は、夫の海外赴任には同行せず日本の留守宅に戻って「有閑夫人」となるが、「なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけ」たいと考えて本を読んで勉強しはじめ、36歳のときに、創設されたばかりの築地小劇場の研究生の入所試験に合格。新劇に理解のある夫の同意も得て俳優としてのキャリアをスタートさせている。

彼女の場合、学歴が直接的なキャリア形成の手段になっていない点では、前節で検討した多くの芸能家と共通している。しかし彼女の場合、見方によっては、幼少期以来の教育が、結婚に媒介される形で間接的に後のキャリア形成を促しているともとれる。加藤（1997）は、男性における階層的再生産は、出身階層の高さが自身の学業達成や職業達成を通じて高い階層に回帰する現象として理解されるが、男性支配のジェンダー秩序のもとでの女性の階層的再生産においては、出身階層の高さがたとえ自身の学業達成や職業達成に結びつかなくても、男性との結婚において有利に働く女性的特性の形で資本として蓄積されて結婚を通して高い階層に回帰しうることを指摘し、そうした女性ならではの特性を「家父長制資本」と呼んでいる。東山の場合も、養家の「経済・文化資本」に支えられて高い階層の男性と結婚するための徹底した教育を受けてその通りの結婚をしている点では加藤のいう「家父長制資本」を媒介とした階層的再生産のパターンに相当する。しかし彼女の場合、さらにその先に、高い階層の男性と結婚したことによって身につけることのできた新たな文化資本を自らの職業達成に再度転化させることに成功している点で、極めてユニークな事例と言えるだろう。

7. 考 察

以上、文筆家・文芸家、音楽家、芸能家の別に、学歴、家庭環境、結婚の影

響に焦点を当てながら、「私の履歴書」を執筆した明治・大正期生まれ女性エリートの輩出過程の諸特徴を確認してきた。最後に、今回明らかになった傾向を同時代の男性エリートたちの特徴と比較することで、より女性に特徴的な傾向と、そうした傾向が生じる理由について考察する。

第1に、「私の履歴書」を執筆した明治・大正期生まれの女性エリート（存命者を除く）は、広義の「文化人」にほぼ限られていた。これと関連して、今回の対象者には、結婚のための手段ではなく職業的地位を表示するために学歴を取得する属性主義的ルートをたどる者が1人もおらず、音楽学校卒業の音楽家を除いて、明確に学歴が職業達成の条件になる業績主義的ルートをたどる者も少なかった。これは、属性主義的ルートの典型である「家」型ビジネスの経済エリートや業績主義的ルートの典型である官公庁職員や大企業出身のメリトクラティック・エリートが今回含まれていなかったことによる。「私の履歴書」を執筆した同時代の男性エリートには、属性主義的ルートをたどる旧中間層出身や業績主義的ルートをたどる新中間層出身の「経済人」（多賀・山口 2016）が多く含まれているのとは極めて対照的である。また、今回の対象者の中には新聞社勤務等の経歴をもつ者もいたが、明治から大正前期には新聞社等も縁故採用が主流（河崎 2001）であり、企業にメリトクラティックな採用制度がそれほど浸透していなかった。「私の履歴書」執筆者で、明確な業績主義的ルートや職業的地位表示のための属性主義的ルートをたどる女性の登場は、戦後の新制教育制度を受けた世代まで待たねばならないようだ。

第2に、出自家族の家庭環境に関しては、男性の文化エリート（多賀 2020a, 2020b, 2021）に勝るとも劣らないほど文化的・経済的に恵まれた家庭の出身者が多い傾向がうかがえた。また、彼女らの職業キャリアに対して、親が最後まで反対し続けた例が少なかったが、この点は同時代の男性文化エリートとはやや対照的だった。世襲制の芸能家や家業を営む美術家を除けば、同世代の男性文化人の多くは、出自家族による反対をなんとか押し切ったり、親が反対する中で教師など周りの人々に支えられて芸術家や芸能家になっていた例が少な

くない (多賀 2020b, 2021)。それに対して、今回の事例では、当初から、あるいは最初に反対しても最終的には、親がキャリア形成を支援している例が多かった。この理由として、少なくとも次の2つの可能性が考えられる。1つは、女性の場合、男性とは異なり、出自家族や結婚家族における扶養役割を期待されにくく、自由にさせてもらいやすかったという可能性である。もう1つは、むしろその逆で、自叙伝を執筆するほどの女性エリートにかかる「生存者バイアス」の影響の可能性である。つまり、本人の希望する教育を受けたり職業を選んだりするチャンスが男性以上に少なく、親以外が支援してくれる確率も低かったなかで自らの意思をなした女性たちにあっては、男性以上に親による支援が不可欠だったとも考えられる⁴⁾。

第3に、キャリア形成に対して結婚生活が少なからぬ影響を与えている点である。確かに、メリトクラティック・エリートであれ文化エリートであれ、当時の男性エリートの多くが、妻によるいわゆる「内助の功」によってキャリアを支えられているとするならば、男性エリートが結婚からキャリアにポジティブな影響を受けることは珍しくないともいえる。しかし、今回の対象者の事例は、それにとどまらず、夫が直接妻の仕事のマネジメントをしたり、夫婦で一緒に仕事をしたりしながらキャリアを築き上げていった例が多いのが特徴である。他方で、結婚生活がキャリアに対してネガティブに作用し、仕事と結婚生活との葛藤に苦しんで離婚を選択しているケースも少なくなかった。こうした事例は同時代の男性の自叙伝 (多賀 2014, 2020a, 2020b, 2021; 多賀・山口 2016) ではほとんど見られない。こうした男女間の相違には、戦前の女性文化エリートにおいては、出自家族による支援のみならず、結婚するなら夫の協力や支援もなければ職業達成を望みにくかったことが反映されているのではないだろうか。

注

- 1) 「私の履歴書」は、1956年から日本経済新聞の文化面に掲載されている連載自叙伝で、現在も継続中である。ウィキペディア「私の履歴書」の執筆者リスト（2021年5月31日確認）をもとにカウントしたところ、1956年の掲載開始から2020年末までの「私の履歴書」の全執筆者に占める女性の割合は、全体のわずか5.7%（855人中49人）でしかない。参照した自叙伝のテキストに関して、日本経済新聞社「私の履歴書文化人シリーズ」に自叙伝が収録されている人物については同シリーズの書籍を使用し、それ以外の人物については『日本経済新聞縮刷版』で掲載当時の紙面（1人が約1か月間ほぼ毎日約30回を連載）の全該当ページをコピーしたものをを使用した。
- 2) 「私の履歴書」を執筆した経済人の自叙伝を集めた「私の履歴書 経済人」全38巻が2004年に刊行されているが、執筆者243人はすべて男性である。
- 3) 宝塚音楽学校「学校の歴史」
http://www.tms.ac.jp/about_tms/history.html（2021年1月5日最終確認）
- 4) 後者の可能性については、第73回日本教育社会学会大会での筆者の報告に対する井上義和教授（帝京大学）からの質問に示唆を受けている。

参考文献

- 麻生誠 2009『日本の学歴エリート』講談社。
- 稲垣恭子 2007『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社。
- 上村千賀子 2012「奥むめおにみる複合キャリアの形成過程—戦前の活動を中心として」『NWEC 実践研究』(2), 51-66.
- 加藤隆雄 1997「女性文化と家父長制資本—ジェンダーの再生産理論をめざして—」『教育社会学研究』61, 5-24.
- 河崎吉紀 2001「新聞記者の制度化—戦前期における採用と学歴—」『評論・社会科学』66, 141-159.
- 河野銀子 1995「エリート女性の輩出ルートに関する考察—衆議院議員を事例として—」『教育社会学研究』56, 119-137.
- 冠野文 1996「女性エリート輩出にみる戦後改革のインパクト—外面経歴および価値意識の検討を中心に—」『教育社会学研究』58, 103-123.
- 小山静子 2008「高学歴女性にとっての学校—鳩山春子・相馬黒光・神近市子—」小山静子・太田素子編『「育つ・学ぶ」の社会史—「自叙伝」から』藤原書店, 135-178.
- 多賀太 2014「近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察—『私の履歴書 経済人』からの抽出事例を用いて—」『関西大学文学論集』64(3), 27-54.
- 多賀太・山口季音 2016「近代日本における家族の教育戦略に関する一考察—旧中間層と新中間層の比較を中心に—」『関西大学文学論集』65(3-4), 135-163.

近代日本における女性エリートの輩出過程に関する考察
—「私の履歴書」執筆者の事例から— (多賀)

- 多賀太 2020a 「近代日本の文化人輩出過程に関する考察 (1) —大正期生まれ伝統芸能家における家庭環境と学校教育の影響—」『関西大学文学論集』69(4), 137-161.
- 多賀太 2020b 「近代日本の文化人輩出過程に関する考察 (2) —著名画家輩出における家族・学校・地域の影響—」『関西大学文学論集』70(3), 177-204.
- 多賀太 2021 「近代日本の文化人輩出過程に関する考察 (3) —著名美術家(画家以外)の輩出における家族・学校・地域の影響—」『関西大学文学論集』70(4), 113-140.
- 中村牧子 2018 『著名人輩出の地域差と中等教育機会—「日本近現代人物履歴事典」を読む』
関西学院大学出版会.
- 山内乾史 1995 『文芸エリートの研究—その社会的構成と高等教育』有精堂.

謝辞 本研究は科研費 (18K02429) の助成を受けたものである。